

石巻市医師会報

2013. 9

No.260

題字・舩医師会長



東北グリーン

撮影 森 秀行

東北人の魅力

東海林 建 一

震災後3ヵ月ぐらいたったある日曜日、電話があった。「名古屋からボランティアとして岩手県に来ているセイエド・タヘルと申します。政本先生から東海林先生に挨拶に行きなさいといわれてきました。一度お伺いしたいのですが…。」政本先生というのは大学の先輩で、愛知県の半田市で腎透析の医療機関を運営している内科医である。アルバイトとして勤務していた病院を買い取り管理者となったが、今や数カ所の医療機関を経営し、医師としてよりも経営者として多忙な日々を送っている。

翌週の日曜日に岩手県の千厩からカーナビのない車で、苦勞してタヘル君が拙宅にやってきた。彼は震災直後に救援物資を車に積んで宮城県に来た。最初は石巻の湊小学校で2ヵ月間ボランティア活動を行い、その後、岩手県平泉に拠点を置き方々の被災地に赴いて活動している。

タヘル君はイスラム教徒で、アハマディアという弱小な宗派に属しており、故郷のパキスタンではスンニ派やシーア派という大きな宗派の弾圧を受けることが多い。そのためもあるのだろうか、彼は名古屋で貿易商を営んでいる兄をたよって、20年前に来日し、兄と共同で貿易の仕事をしていた。46歳で、同郷の奥さんと中学2年、小学6年、小学4年の3人の子供がいる。

アハマディアには「困った人がいれば助けなければならない」という教えがある。幼少時からそれが当然の事と考える環境の中にいたので、彼は、震災直後、ほとんど反射的にトラックにアハマディアからの救援物資を積み込んで東北を目指した。ボランティア活動をしている理由を岩手の古老に問われたときの彼の困惑した表情が忘れられない。当然の事というのでは納得してもらえないと思い、何とか理論的に説明しようと試みるのだが、宗教的な信念を理解してもらうのは容易ではない。彼によれば、世の中で起こる森羅万象は

すべて神の計画によるものであり、不条理とか偶然ということはありません。何と無しにキリスト教徒みたいなことを言う。後日、彼の紹介で知り合った株式会社TKB社長の佐多保彦氏によると、「イスラム教は旧約聖書を經典としているので、キリスト教と共通点が多い」ということだった。

TKBという会社は以前、東機貿という名称だったと思うが、人工呼吸器などを扱っているので、医療関係者には知られた会社である。現社長佐多保彦氏の御尊父は医師であったが、医療機械の事業に関与したことを契機に、自ら東機貿という会社を興した。二代目社長の保彦氏が、その会社を欧米に多くの関連会社を有する大会社にした。佐多氏は被災者の自立支援を目的に2011年5月に「連帯 東北・西南」という財団法人を設立した。タヘル君は支援活動で佐多氏と出会い、現在は「連帯 東北・西南」の評議員として活動している。

7月の土曜日にしばらくぶりにタヘル君が我が家を訪れた。「ボランティア活動のため家族と過ごす時間がないので、家族ともども仙台に転居することにしました。妻も子供たちも了解しています。」突然のことで驚き「もう十分にボランティアとして被災者のために奉仕したのだから、名古屋に帰って本業に精を出したほうがいいのではないかと説得したが、彼の決心は固いようだった。東北に来て様々な人々と知り合った。震災後の精神的に冷静さを取り戻していない人が多い時期でもあったためか、仮設住まいの人、ともに支援活動に携わった地元の人などの中に、腹を割って胸の内をさらけ出すことのできる友人がたくさんできた。これらの貴重な人間関係を、名古屋に帰ることで失いたくない。しからは家族もろとも仙台に引っ越し、そこを拠点にして「連帯 東北・西南」の仕事を続けようと考えた。家族と同

じくくらい東北の友人達は、彼にとっては大切なのである。

タヘル君はカラコルム山脈に近いパキスタン北部で生まれ育った。幼い頃から日本人観光客と接していて、日本にあこがれを持っていた。私の推測だが、彼の育ったパキスタンの田舎の人々と東北の田舎の人々の心情は似ているのではないかな。私は学生時代の6年間を名古屋で過ごしたから分かるのだが、一般的に東北人は、名古屋人に比べて、始めはとっつきにくいけど、知り合うと開放的、率直で、なんでも話し合える遠慮のいらぬ人間関係を築きやすい人々である。タヘル君の人は素朴で、名古屋人というよりも東北人に近

い。もしかしたら、20年間の名古屋生活で感じていた違和感が、東北では感じられず、東北こそ自分の住むべき場所であるとの想いに至ったのだろう。

先週、仙台の緑の多い住宅地に新居を定め、2学期から子供たちは仙台の学校に通学することになった。小学校4年生の女の子は、カトリック系の小学校に入ることになり、タヘル君は入学に際して「ミサには出ない。宗教の授業は受けない」という条件をだし交渉したが、校長先生は快諾してくれた。日本以外の国ではありえないことである。タヘル君は日本人の寛容さ(いい加減さかもしれない)にいたく感謝していた。



カメラを向けると途端に緊張するタヘル君